

<b>Title</b>	序に代えて：新しい文化総合の課題：聖学院大学大学院の設立に当って
<b>Author(s)</b>	大木, 英夫
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所紀要, No.8, 1996.1 : 3-5
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3030">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3030</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

## 序に代えて

新しい文化総合の課題——聖学院大学大学院の設立に当って

一九九六年四月一日から、聖学院大学大学院政治政策学研究科が開設されることになりました。これは、聖学院大学政治経済学部と聖学院大学総合研究所との上に立つという形式的にも特徴をもった大学院であります。教授陣もまた出色の体制であります。総合研究所の飯坂良明教授、永岡薫教授、渡邊守道教授が大学院専任教授となられ、学部から参加されるのは安倍北夫学長始め平良教授、澁谷浩教授、山田克己教授、保谷六郎教授、前田信雄教授、山本鐮造教授、北山直樹教授、後藤兼一助教授、村上公久専任講師、また総合研究所の客員教授として迎える速水優氏（前経済同友会代表幹事）、恒松治治氏（元島根県知事、前独協大学学長）、金平輝子氏（前東京都副知事）、佐々木信夫氏（中央大学教授）に加えて非常勤講師陣には、河上民雄氏（前東海大学教授、元衆議院議員）、本橋正氏（学習院大学名誉教授）、大木雅夫氏（上智大学教授、日本学術会議会員）、近藤勝彦氏（東京神学大学教授、聖学院大学宗教センター所長）、田中靖政氏（学習院大学教授）、小松崎清介氏（東京情報大学教授）など著名の人々が参加されます。

\*

最近大学世界にも変化の波が押し寄せ、種々の改革が叫ばれております。これからの大学は「個性」的であることが要求されています。个性的であることは、すべての歴史の中に存在するものに向けられた要求であると思います。歴史

はすぐれて個性的なものの世界だからであります。個性とは、いわば「歴史的なもの」のカテゴリであります。

時流に便乗するタイプの大学院設置もあることは周知のとおりであります。しかし、それをもって「個性」的ということはできません。それは時流とともに消滅して行くことでしょう。個性的ということは、たとえば音楽でも絵画でも、文化的表現と結びついています。それは個性的として独特でありますが、しかしその中には永続的なものとか、普遍的なものを含蓄するような独特さであります。個人のもって生まれたその人特有の性格とか傾向とかいうものと同一ではありません。そういうものは、文化的普遍性をもってはいないのであります。大学の個性とは、文化形成に関わるものであります。諸力を統合して、ひとつの目的へと向かわしめる独特な総合を産み出す力であります。

ところで、聖学院大学大学院の個性とは何か、ということであります。それは現代の文化総合の課題に取り組むべく構想されたところに含まれています。中世時代にはカトリックによる中世の文化総合が実現されました。それを歴史家は「コルプス・クリスチアナム」と呼びます。それは千年以上もかかった偉大な文化的達成でありました。近代世界は、その分解から発生しました。昔の統合を失って世界がばらばらであるということは、近代哲学者の「認識」をまつまでもなく、一般人の普遍的な「実感」でありました。分解のもたらす害悪については言うまでもありません。一体「新しい文化総合」があるでしょうか。それこそこれからの世界史的全人類的大課題となつて行くと思います。コルプス・クリスチアナムの崩壊は、宗教改革を機会として起こりました。それに代わる「新しい文化総合」は、向こう何百年単位の長大な歴史的課題となることでしょう。プロテスタンティズムが近代世界の形成に何らかの関わりをもってきたことは否定できません。もし今日の文化総合が、中世のカトリック的文化総合に対してプロテスタント的文化総合として企

てられる必然性をもっているとすれば、聖学院大学大学院は、このたび、まさにその課題のために設立された大学院として歴史の中に登場するのであります。大学の使命は百年単位で考えられるべきものであります。聖学院大学大学院が担うべきその課題は、日本の新しい文化の基礎に関わるものであります。日本にとどまらず、それは世界の新しい秩序形成の根幹に関わるものでもあると思います。期待される現代の文化総合が、ヨーロッパ中世における教会の文化支配という形であることはできないということは言うまでもありません。むしろデモクラシーの諸原理（その課題を聖学院大学総合研究所の「自由の伝統の再検討」という共同研究は取り組んでいる）を、消極的に借用するのではなく、積極的に日本の新しい文化形成、社会形成へと効果あらしめる、つまりその〈理念〉を〈政策〉にまで展開して行くことを企てるものでなければならぬであります。それを日本におけるプロテスタント文化大学としての聖学院大学大学院は、みずからの使命として自覚するのであります。プロテスタント文化総合という目的に向かって新しく大学としての務めを果たす、その営々たる努力がやがて聖学院大学大学院の個性となるであろうことを期待しているのであります。

一九九六年一月

聖学院大学総合研究所長 大木英夫